

恋娘昔八丈

才三勘当の段

太刀は鞘、弓は袋に納めても、納め兼ねたる萩原藏人、宝の茶入れれ紛失より、病氣と言ひ立て引き籠る。庭の掃除の下郎共、箒目入れて打つ水の、流れは清き武士の、行儀正しく見えにける。

角内「ヤレ／＼忙しやく。イヤナニ関内、毎日々々の箒目、息筋張つて精出しても、二合半の物相米、ハ／＼、」

関内「これ／＼角内、我々が働きはなんでもないこと。この頃お上は大騒動」

角内「ヤそりやまたなぜ、なぜ」

関内「さればさ。当主萩原藏人様、久吉公より賜はつたる勝鬨の茶入れ大切になされしところ、御舍弟千草之助様、十六夜といふ太夫にうつゝを抜かされ、身請け

オ三「さればいの、昼は人目がある故に、話もとんと身に染まぬ」

お駒「ア、コレ、わしが話は染まぬ筈。この中小庭の垣根で、福さんとお前と二人、朝顔の種取つてみやしやつたを見た時の、わしが心はどうあらう。殿御の心は朝顔の、盛り短かき忍び逢ひ。外になんにも言ふ間さへ、泣いて幾夜か明かすのも、わたしやお前に欺されたと思へどやつぱりいとして、思ひ纏るゝ片糸の、切るに切られぬ身の因果、憎や」

と抓る紫に、恋の涙や萩の露、打ち凭れたる恨み泣き。
オ三「これはしたり、声が高い。泣き顔を人に見られ浮名が立つたら、なんとしやる。そしてマア、あのお福殿は歴とした男のある身。なんのわしらに埒もない。コレ、そんな事苦にしやんな、外へ散る気は微塵もない」

と、すかせば
さすが娘気の、晴れ間も早き村雨や、
また濡れ初むる花と

の金にすると言ふてその宝を持ち出し、紛失したげな

角内「ヤ、そりや大変だ。して千草様はどうなされた」
関内「されば、深い様子は知らぬが、千草様はその日より行方が知れず、御家老の尾花六郎右衛門様、昼夜御祈念なさるれど、かの茶入れの在り処も知れず、今にも千草之助様お帰りならば、痛や腹をア、おいとしや」

と、噂半ばへ
立ち出づる才三郎、下人が声々聞き咎め、

オ三「ヤイ、うぬらは下部の分としてお上の取り沙汰。只今は差し赦すが、この以後きつと嗜め」

と、呵り付けられ
下部共、這々逃げて入りにけり。

・恋に引かるゝ腰元の、お駒は一間を忍び出で、『人目なければよい首尾』と傍へ立ち寄り、

お駒「申しオ三さん、今日はよい首尾ではござりませぬかえ」

花、妹背わりなく見えにける。

・いつの間にかは後ろより、才三郎が父六郎右衛門、『ハツ』とびつくり飛び退いて、うぢつく二人をぐつと睨め付け、

六郎「ヤアそこな不屈者めが。差し当つたるお家の騒動、一家中も心々。油断ならざるこの時節、大事を前に置きながら、女に心迷はされ忠義を忘るゝ人外め」

と、鋭き父が怒りの顔色、

『ハツ』と二人は気も消え／＼、
何思ひけん才三郎、帯せし鞘に手を掛ける

お駒「ノウこれ待つて」
と取り付くお駒、
父は声掛け、

六郎「ヤイ待て倅、犬死するか、狼狽者」
と、決め付けられて
涙を流し、

オ三「お家の重宝勝鬨の茶入れ紛失せしも、千草様御

放埒とはいひながら、持ち出だせしは某が落度。その上不義の悪名受け、なんと存へゐられましよう。先立つ不孝は御用捨」とまた取り直すを、

六郎「イヤサこりや、宝の茶入れ紛失より、殿蔵人様の御怒り、弟君千草之助様、不和となつてお行方知れず、もし澁川へも身を沈め、お家に疵ばし付け給はんと母君様の御心労。少しは御安堵遊ばす様、忠義を励む心もなく、見下げ果てたる人でなし。サ、只今より勘当ぞ」

と、言ひつゝ才三が大小挽ぎ取り、庭へはつたと蹴り落とせば、

才三は『ハツ』と心付き、

才三「ハアそうぢや早まつたり。一旦の不義の科、死して遁れん様もなし。この上は命存へ、宝の在り処詮議仕出だし、再び手に入れ我が君の御賢慮休め奉らん。首尾よく仕終せ立ち帰らば、御機嫌直され親人にも御勘気赦し下されかし」

ヤアく、誰か参れ」

と詞の下、

お次に控えし下部共、白洲へ立ち出で躓る。

六郎「ヤイ関内、その女、城木屋庄兵衛方へ送り届け

よ。まつたそれなる才三郎、門前よりぼつ払へ」

と、下知に

従ひ下部共、立ち寄つて引つ立つる、

才三もさすが肉縁の、血筋に引かれ出で兼ねれば、

お駒は始終見るに付け、猶いや勝る憂き思ひ、見送る父も恩愛に、乱るゝ心取り直しても目に浮かむ、涙の雨や萎るゝ尾花、名残りも惜しや鴛鴦の離れ際、泣くく別れ

八郎「才、よく言ふた。我れとても一人の倅むざく殺すが不憫さに、勘当する我が心。こりやお駒、そちもまた倅が事、ふつゝりと思ひ切り、一刻も早く屋敷を下がれ。汝らが忍び逢ふ事、お上へ知れなば身の大事。そこを計つて某が、願書を差し上げそちが身は、早やお暇を賜はつたり。心を改め宿へ帰り、そちが親庄兵衛へ随分共に孝行を」

と、事を分けたる一言に、

お駒は正体泣き倒れ、

お駒「不義はお家の御法度と、思ひ切つても切られぬは、因果同士の悪縁で、苦勞を掛けしもわたし故。たゞこの上は才三様、お咎めのない様に頼み上げます、上げます」

と、たゞ伏し沈むばかりなり。

『かくては果てじ』と六郎右衛門、瞬く目を押し拭

ひ、

六郎「由なき嘆きに隙入つて、人目に立つ程恥の恥。お駒、早く帰れ。サ、倅も立て、立て、エ、未練千万。

城木屋の段

言ふもさらなる繁華の地、

人の心も国がらに、自然と広き武蔵野の、月日も繁く立ち続く家居隙なく諸国から、入り込む人と出る人と、出家侍諸商人、百万石も疝癖も、擦れ違ふたる繁昌は、金のなる木の植えどころ。

角引き廻す家立ちや所久しく住み馴れて、人の思惑身代も堅い商売城木屋と、門に印の杉ならで軒に並ぶる材木は、幾年経りし老舗なり。

主庄兵衛はいつぞやより、引つ籠つたる目の病ひ、

店を預かる丈八が、凭れ掛かつた帳箱に、勿体付ける番頭顔、

丈八「ア、こりやくく小僧よ、通り町の尾張屋へ往て、

『今朝の小割と貫十挺の代金、只今遣はされませ』

と、この書付持つて請け取つて来い。ア、こりやくく、これ、また芝居へ入つてをるな」

丁稚「アイ／＼合点」

と言ひ捨て、とつかは急ぎ走り行く。

後には一人丈八が、滅多無性に呑む煙草、雁首傾け思案顔。

・思ひ内にあれば色々勝る憂き思ひ、屋敷の勤めいつしかに、思ふに別れ思はずも、呼び返されし親の内、今宵の事の氣に掛かり、『もしその人の来よかし』と、表の方へ立ち出づる。

姿ちらりと、

丈八「お駒さん、お駒さん。申しちよつと／＼こちらへお出でなされませ／＼、ハテマア、こちらにおいでなされませ。サテマア今晚は聳さんがお出でぢやげにござりますな。／＼、さぞお嬉しうござりませうな。本にあれ／＼、あたお目出度い、あた忌々しい事でござりますはい。アノマア、嬉しさうな顔はいの」
お駒「エ、丈八の何言やるやら。わしやそんな事聞きたうない。耳が穢れる、穢らしい。聞こえませぬはと、さんか／＼さん、わしが心にどの様な義理約束がある

らうやら、問ひ談合もあることか、事を好みしなされ方、かういふ事を露程も、知らせたい聞かせたい。どうせうぞいの、どうせう」
と、目には涙の玉霰。

我が身に受けて丈八が、首筋元から、ぢいは／＼ぢいは／＼、ぢいは

丈八「ハア、我れは包むと思へども、穗に頭はれしか、ホイ、これはしたり。マ面目な、アハ／＼、ない。イヤモこれまでも幾度か、もう言はうかくと、口まではぞろ／＼／＼／＼出たけれど、言ひ出し兼ねてをりました。がどうぞお前に、夢になと、知らせたいと思ふから、マア／＼城木屋の番頭様とも言はれる身が、浅草のお地藏様へ、七日が間、コレマ裸足参りを致しましてござりまするでござります。／＼、

『申し／＼地藏様え、こりやこれわたしが因果でござります。何卒この恋叶ひます様に、たつた一度でござります。がまた、少々はハア、ハア／＼／＼／＼半分でも堪忍致しまする。どうぞ貴方様の御利生を頂き

まして、大願成就なさしめ給へ、南無地藏菩薩

様々々々々』と一心掛けて願ふたら、サア／＼／＼／＼／＼地藏様の御利生といふものは、イヤモとんと争はれぬものぢやはいな／＼、お前さんがわたしにそれ程まで心中立て。今夜の聳が『嫌ぢや』とは、コレ嬉しいぞえ、忝いぞえ／＼。これいなあこれ、わたしや先／＼手を含はして、拜んでばつかりをりませはいな」

お駒「エ、なんのこつちやぞいの。なんのそなたに阿呆らしい。わしが立つるは、つひ／＼／＼／＼」

丈八「エ、つひ／＼／＼／＼に、ホオつひ／＼／＼／＼つひ／＼／＼に。／＼、矢張りおれぢやアハ／＼、おれより外に誰もよい男はないもせぬもの／＼、ア、それにまた、近所の若い者の噂にも、イヤモあの城木屋の娘は、あいつはマア氣疎いもんどぢやないかえ、あいつはマア。背はすらりと高し、器量はよし、色は／＼／＼／＼と白し、ア、白い子ぢや、白子ぢや／＼、ありやあれ城木屋ぢやない、白子屋のお駒はんぢやと言ひやんす

ぞえ。マお前／＼、それ程に仇名する評判娘、そつちからも氣があるとは、エ、忝い有難い／＼／＼」

と、滅多無性に嬉しがり、手褒め自惚れ有頂点。

下女「丈八殿々々々。おかみさんが召します』

と呼び立てられて、

丈八「オツト今そこ往く、今往く／＼／＼、エ、とんとモどんな事ではあるはい。ア、コレお駒様、お駒様、／＼、まだ言ひ残した事があるが、マア後に、後に」

と目と仕方、仕済まし顔で走り入る、
お駒も胸へ差し登る、癪を

（ラクリ）押さへて奥へ行く。

・生業は、実に剃刀の刃を渡る、オ三も今は主親に、捨てられ果てし髪結の一日所定まらず、忙しさうにちよ／＼走り。

下女のおきくが事に持った三方拭き／＼、

下女「コレ髪結殿、小僧殿を呼びに遣、来てくれたがよいはいな」

才三「サア、直ぐに参じませうと存じましたが、お向うの稚の月代、何がかの例の髪惜しみ、漸う仕舞ふてたつた今。そうして旦那にはどちらへぞお出でなされますのでござりますかえ」

下女「イエ、どこへも行きやなされぬ。が今夜こちらのお駒さんに智様が這入る故、モ、大抵忙しい事ぢやないはいな」

才三「エ、ナ、なんと仰ります。今夜内方のお駒さんに智さんが、そりやお前、本かえ」

下女「オ、この人はいの。なんのその様にびつくりする事があるぞいの。本にお駒さんもこなさんに、『顔を直して貰ひたい、早う呼んで来てくれ』と言ふてであつた。どりや知らせませう」

と、入りにけり。

・見送る才三が思案顔、

才三「ハテ合点のゆかぬ。これまでのお駒が親切、浪人

め、狸め、よう人を騙したな。物言ふも穢らはしい」と胸倉取つて引きしやなぐり、踏んづ擲いつ突き飛ばし、睨み付けたる目に涙。

お駒は顔を振り上げて、

お駒「思ひ掛けない今宵の様子、聞かしやんしたら腹が立たう、さぞ憎かろう。さりながら、そりや聞こえませぬ才三さん、お前とわしがその仲は、昨日や今日の事かいな。屋敷に勤めたその内に、ふつと見染めて恥かしい。恋のいろはを袂から、そつとわたしが心では、天神様へ願掛けて、梅を一生断つたぞえ。そのお蔭やら嬉しい返事、二世も三世も先の世掛けて、誓ひし仲ぢやマないかいな。今宵の事を知らせまし、問ひ談合もせうものと、待ち兼ねてゐるものを、あんまり酷い愛想尽かし、叩いて腹が癒るならば、心任せにした上で、『もう堪忍をしてやる』と、言ふて堪能させたぞ」

と、男の膝に縋り付き余所を憚る忍び泣き、真実見えていぢらし。

の身を色々世話してくれた志。それに今夜の智入りは、ム、こりや疾うから性根が腐つてあるはい。エ、そういう事とは夢にも知らず、騙されたが口惜しい。この上は破れかぶれ。言ふてく言ひ破らうか。イヤくくく、大事を抱えた我が身の上。兎にも角にも世の中の変り易いは人心。ハテ、どうがな」

とつおいつ、胸はもやく立つゝあつ、

お駒は下女が知らせをば、聞くと心は飛び立てど、そらさぬ顔に一間より、

お駒「髪結どん、先から待ち兼ねてゐたはいの」と後先見廻し、

お駒「才三さん、エ、逢ひたかつたくく、逢ひたかつた」

と取り纏る、訳も涙に文もなき。

取つて突き退け、

才三「ナニ逢ひたかつた。へ、なんのおのれがおれに逢ひたかろ。今夜智の来る事も何もかも聞いてゐる。言ひ訳も何も聞かぬぞ。見下げ果てた畜生め、犬め、狐

・才三も今更手持ちなく、

才三「そつといふ事であらうとは、おれも思ふてゐたれども、今夜智が来ると聞き腹が立つたもそなたが可愛さ。我れとてもこの様に姿を糞し苦勞をするも、紛失の茶、紛失の茶入れをば尋ね出したいばつかり。といふてどこを尋ぬる当途もなし。それ故にそこごと、所を變ゆる町髪結。モ何から何までそなたの世話、真実なきは知つてゐる。イヤモ、堪忍したも、堪えつても。コレ、人が見りや悪い、イヤサ、泣き顔しやんな、エ、モ泣きやんな」

と、背な撫で擦れば娘気の、

お駒「そんなら疑ひ晴れたかえ。ア、嬉しや」と寄り添ひて、割りなき仲ぞ睦まじし。

・奥の障子をそろくくと、探り出でたる親庄兵衛、

庄兵衛「藤七どん、髪結どん来てぢやないか。オ、大儀々々。晩にはちつと客もあり、月代が剃つて貰ひたい。娘、湯を取つて来てくれ」

と何気なけれど

気味悪く、うちくもちく手盥てだらに、汲んで来る間に剃刃を、

合はず目と

目に見え分かぬ、

親は白髪さかやまの月代と、

共に気を揉む顔と

顔、言ひたい事も口なしの、離れ難なき二人が心。

庄兵「マ、マアマ機嫌もよいは、頭はどうなと束ねて置いて下され。こりやお駒よ、序ついででながらちよつと言ふて聞かす事がある。マ、こゝへ来い、こゝへ来い、ハテマアこゝへ来いやい。サテマ、碌々ろくろくに得心もさせず今夜の智入り、親甲斐の無理我儘わがままと、定めて恨んでもぬ様し、また若い者の事ぢやによつて、なんぞかう、そこらに無茶苦茶とした事もあるもんぢや。けれど、こゝをよう。ヤナニ髪結かみむすどん、こなさんも傍そばにゐる、不肖ぢや、もつとの間ぢやと思ふて、聞いて下され。元わしは腹からの町人でもない。さるお屋敷に勤めて

ゐたが、若い時の後先あとしきなし、色と酒とに使ひ果たしお手討てうちちに極つたを、御主人の若旦那御誕生のお祝ひ

に、奥様の命乞ひでモ何事のうお暇下され、トツトモそれから方々流浪の内、縁でかなこの家やに手代奉公。前の親旦那が不憫を加へて下さつて、『ヤナニ、後を遣る男の子とてもなければ、幸ひ娘に我れを娶め合あはし、この家督を譲るぞや』と他人のおれに身代みしろをほつかり下さつた大恩。そちの母は、女房とはいひながらおれがためには、アリアアレ大事のお主様ぢやはい。おのれやれ、遺言いしごんの通り家に庇は付けまいと、身を粉こなに砕いて精出しても、サア時の災難は遁れぬ。この前の大火事にころりつと丸焼け。その上、五年前から、コゝこの目を煩ひ、とうく内障そこのひといふものになつて、何から何まで左前。アノ今夜来る喜蔵といふはな、元は知らぬが近年の出来分限できぶんげん。講釈場こうしゃくばでつひ近付ちかきになつてから、懇ろこんらにしてくれての、マ、問屋の諸しよ壻むすこも付けたがよいと、金放り出してくれたその時は、『ア、若い人ぢやがテモマ親切な人もあるもんぢや。』

マ何かは知らず 忝かたじけない』と悦よろこんでゐる矢先、おれを密かに内へ呼んで、『ヤコレ親仁ちかぢどん、かう身を入れ

て世話するのも外ではない、そちの娘お駒を女房に貰ひたい』とモつびきならぬ言ひ方。嫌と言や、金戻せぢやはいい。いつそこの家屋敷道具を売代うりしろなし、親子三人着の儘出て行かうと思ふたがの、コレこゝをよう聞いてくれ。あの女房を路頭に迷はしては、過ぎ行かされた親旦那のお位牌ゐらひへ、おりや、おりやどうも顔が合はされぬはい。モ切ないところぢや、サその切ないところぢや程に聞き分けて、こりや娘、この親が手を合はす。どうぞ今夜のところを機嫌きげんよう素直すぢに盃むちしてくれ、ヨ、ヨ、ヨイヤ、ヨ。最前さいぜんちらりと二人の様子、サ聞いたでもなし、聞かぬでもない、おりやよう飲み込んでゐる、サ、嫌ぢやあらうくと察してゐる。がこゝはまた一番、親が頼みぢや、こりや娘、どうぞ辛抱しんぱうしてくれ

と、義理と恩愛おんあい百千筋ももぢ、絡まる胸の白髪さかやまの親仁、恥も厭はず見えぬ目に、余る涙のいたはしき、

娘は始終聞くに付け、『勿体ない』とは思へども、思ひ切られぬ身の因果、なんと答へもないぢやくり。

才三郎も共涙、

才三「事を分けて 仰おしやる事、一つは親御へ御孝行。お前さんの心の内はな、よう飲み込んでをります程に、なんぢやあらうとつひ『アイ』と仰りませ。サ、サ、サア」

お駒「アイ」

と一言が、百千万の憂き思ひ、身を震はして咽なみび泣き。

庄兵「オ、よう得心してくれたく、こりや嬉しい、嬉しいはい。ハテモ盃さへして仕舞ふたら、それからは我れが身持ち次第ぢや。マ朝は早う起きるより、昼時分に起きて朝飯を喰へ。夜はまた大勢人寄せして、何時ともなう夜を更かし、智ちめが言ひをる事をつべこべくと口答へ、小遣こづかいひ銭ぜには湯水使ふ様にどつと撒まき散らせ。そしてアノ、忘れても針やなど手に取るなよ。襦じゆ袢ばんを引ひき摺ずらうが段たんないは。そこらは見えぬ顔してゐやい。イヤモ、なんぼ惚れた男でも、愛想あいさつ尽か

すは知れた事ぢやはい、ハ、ハ、ハ。サ、ナ、合点がい
たか、ヨ。芝居にして見せる八百屋お七の狂言、あり
やあれ娘御ばかりへの見せしめではない。世間の偏屈
な親々にも手本にせいとの見せしめ。これを思へばお
七が親の久兵衛も定めてなんぞ深い義理、ア、その身
にならねば知れぬが浮世、ヤ髪結どん、大儀、娘、後
に」

としほくと、心を思ひ病む目より、見る目いたはし上
辺には、見えねど見ゆる子故の闇、親の心の内障病み、
とぼくと奥へ入りにけり。

・表に繁き雪駄の音、

『人こそあれ』と耳に口、『後に』『後に』と兩人は、奥
と勝手へ別れ入る。

・早や黄昏の店鎖し時、暮れぬ内より箱提灯、立派に出で
立つ細身の脇差、無理勿体の胸くそ鬘、花賀風の佃屋

喜蔵、

丁稚が案内に

主の庄兵衛、目は不由由でも覚えの店、探り出迎ふ持て

成しぶり。

喜蔵「ヤこれはく舅殿、さぞ今晚はお取り込みでござ
りませう。アさてまづ、何かの儀お得心下され我れら
も大慶。この祝言が調はねば、嫌ながらお取り替え申
した金の催促。それでは、折角取り続いたこの城木屋
の家を潰して仕舞ふといふ様なもの。モかれこれ気の
毒に存じたが、まあく今晚の内祝言で、物事が丸
うゆくと申すもの。ア、トサかう申せば、なんとやら
どうかかう如何なれど、仲人も金、ナ、金尽くめにし
て参る拙者、ア、トサかう申せば、なんとやらどうか
かう如何なれど、この城木屋の内にはちと過ぎた花賀
様、ア、トサかう申せば、なんとやらどうかかう如何
なれど、この喜蔵が賀になれば、城木屋の身代は万代
不易と申すもの。なんと、左様ではござりませぬか舅
殿、エヘン」

と、扇バチく身を吹かす、
むつとはすれど、

庄兵「これはくご丁寧な御挨拶。そなたから仰ら

いでも知れてある借入金。しかし金の貸借は相對、金

で娘は進ぜぬぞや。と、サ、ハ、ハ言へば物事に角が立
つ、マアくそれは放つて置いて座敷へござつて娘や
か、にも」

喜蔵「如何様、左様に致さう」

と、互ひの底に「力身」

・ 庄兵「いざ案内」

と勝手から、出づる手代の丈八が、

庄兵「ヤ、賀といふは」

喜蔵「ア、こりや、こりやくく、いかにもく、
いかにも賀といふはこの喜蔵、こりや、こりやくく
く、なんにも言ふなくく、なんにも言ふな。ム
ウ、こりやなんでもござりますか。あの仁はこゝなお手
代殿かな」

庄兵「いかにも、こちらの番頭、丈八と申す者」

喜蔵「ム、如何様、飲み込みのよささうな。こりや
くく、飲み込みのくよささうな、お手代殿。ぢや
がマ、変つたところで逢ふたな」

成しぶり。

喜蔵「ヤこれはく舅殿、さぞ今晚はお取り込みでござ
りませう。アさてまづ、何かの儀お得心下され我れら
も大慶。この祝言が調はねば、嫌ながらお取り替え申
した金の催促。それでは、折角取り続いたこの城木屋
の家を潰して仕舞ふといふ様なもの。モかれこれ気の
毒に存じたが、まあく今晚の内祝言で、物事が丸
うゆくと申すもの。ア、トサかう申せば、なんとやら
どうかかう如何なれど、仲人も金、ナ、金尽くめにし
て参る拙者、ア、トサかう申せば、なんとやらどうか
かう如何なれど、この城木屋の内にはちと過ぎた花賀
様、ア、トサかう申せば、なんとやらどうかかう如何
なれど、この喜蔵が賀になれば、城木屋の身代は万代
不易と申すもの。なんと、左様ではござりませぬか舅
殿、エヘン」

と内懷から取り出だす袱紗包みを手に渡し、

喜蔵「それ、祝儀ぢや納めておけ」

庄兵「これく賀殿、何も心遣いさつしやるな。丈八、
ソレ、ようお礼を申しや」

喜蔵「ア、イヤくく、礼も何も言ふ事ない。こり
や、なんにも言ふなくく。後にゆるりと、イヤナ
ニ舅殿、マア奥へ往て」

庄兵「オ、いかにもく」

喜蔵「サアくござれ」
と打ち連れて、一間へこそは入りにけれ。
・見送る手代が小首傾け、

大八「テ面妖めんような。あの喜蔵きざうめは去年の春吉原で茶入れを騙かたつた仲間内。いつの間にやら、えらい出世をひろいだな、あいつはマア。あいつは出世ひろいでよいけれど、このおれはいつまでもこの家の番頭、この番ぢや、この番、この番。『この番の、桁を外れたたはいなし』とは、おれの事かいなハ、ハ、ハ。それはそうと、この包んだ物は一体なんぢやある。ちよつと中を改めて。ヤアこりやこれ、その時騙かたつた勝鬨かちどきの茶、チヤ、チヤ、チヤ、茶入れぢやはい。ム、これをおれに渡したは、あいつが素性を言ふてくれなと頼たのみの心。ム、そいつはマア言ふてくれななら言ふては遣やるまいが、言はずにおれが黙もくつてゐると、あの娘をあいつが女房に、ヤこいつは壺ひぢや。ア、こりやマアどうしたらよからうのう。いつそこの茶入れの事を代官所へ訴人せう、か。ア、イヤ、マアおれが身みからして、あんまり文あやが抜けぬとけつかるはいハ、ハ、ハ。こいつはどうぞよい思案しあんがありそうなもんぢやが、オ、それよ、アノ娘を連れてこゝをづひとす

この隙ひまにコレ連れて退ひき、野の末山の奥おくでなど、二人ひっそり暮くしませう。お前まへを女房にするならば、たとへ体ていは括くられて、引き廻まわしに合あふとても、だんないくコレ大事だいじない」

お駒「エ、この人はいの、わしやどつこへも行くこと嫌きらい」

大八「なんぢや、どこへも行くこと嫌きらい。そんならやつぱりこの内うちで、おれを巨衆きゆうしゆうにする気ぢやの。そんなら待まちたんせ、仕様しやうがある。いつそ掣しやくめをころりとやり、誰たれ憚はばらぬコレ内うちのか。ハ、こんな縁えんが唐からにもあるか。何をきよろしくしなまずぞ。かうなはれなく。今奥へ往ゆて何気なにげのう、マア寝所ねどころで盃さか、その酒さけにソレ毒どくを入れ、あいつをころりと遣やりさへすりや、後腹止あとはらやまぬといふものぢやい。おりや一走り生薬屋なまぐすりやで、なんでも毒どくを買かふて来る。それを必ず爛鍋かんなべへ、忘れてお前飲まへのみまんすな。どりや往ゆて来こう」

と表うらの方かた、一人飲のみみ込み駆かけり行く。
何を言いふのも気きもそぞろ、『夫おつとのため』と帯引おびひき締め、

るが上じやう分別ぶんべつ。ムそうぢや、そうぢや」
と打ち領うらき、暖簾あたたか押し上げ入いりにけり。

・奥おくは今宵いまよの稀人まれびとと、勝手かたはばたく膳拵ぜんぐしへ、笑わらひの声こゑも辛からき身に、傍かたり見廻みまわし娘むすめのお駒おこま、

奥よりぬつと丈八ぢやうはちが、

大八「お駒さん、お駒さんくくく、オ、お駒さん、そこにかいなあ。逢あひたかつたくく、逢あひたかつた」

お駒「エ、この人はいの、なんぢやいの。わしにびつくりさしやつたはいの、さしやつたはいの」

大八「びつくりさしやつたどころかいのく。サア

くくく身拵みぐしへをさんせいのか」

お駒「身拵みぐしへとはなんぢやいの」

大八「なんぢやいのとは曲まががない。掣しやくめが初穂はつとをせしめぬ間に、おまはんを連れて、この家を駆かけ落ち。さあくく早はやう」

と、言いひつゝその身の身拵みぐしへ。

大八「幸さいひ辺へりに人はなし。サアくくくくく、

心こゝろを固かため奥おくの方かた、行くは女の操みさおをば捨て、一間へ

鈴ヶ森の段

（三重） 急ぎ行く。

人の身の、捨てどころとや名にふりし、鈴ヶ森の仕置き場所、青竹にて矢来を構へ、辺りに煌めく拔身の槍、けがれの役人馳せ違ひ、科人今やと待ち掛けしは、この世からなる地獄の責め、忌はしくもまた恐ろし。

・哀れ見に寄る諸見物、あそこやここに立ち集り、

見物「なんとこの科人も、もう来さうなものぢや。おれは牢屋を引き出すとすぐに通り町へ駆け抜け、それから河岸へ廻つて以上四度見た。がさて美しい娘ぢやはい。あれをころつとやるといふは、あつたらものぢやないかいの」

見物「イヤく、なんぼ顔が美しうても心は鬼ぢや。

丙午ぢやあるまいし、男を殺すといふことが、どの国にかあるものぢやないはいの」

見物「ア、イヤく、そう一途に言はしやんな。女子が

女房が涙声。

女房「いえく、まだ娘は来やせぬけれど、厳しい構えを見るに付け、可愛い娘を殺すかと、思へば胸も張り裂く苦しみ。わしや身も世もあらぬ」

と嘆けば

いとどてゝ親は、

庄兵「道理ぢやく、道理ぢやはやい。今朝も門を引かれると聞いた時、駆け出て逢ひたう思ふたれど、近所の衆に止められて、内で泣いてばかりゐたはいの。今日が親子一世の別れ、せめて最期の暇乞ひ。また一つには娘めが、言ひたい事もあるならば、聞いて迷ひが晴らしてやりたさ。お主のためとは言ひながら、花の様な子を殺す、おれが心を推量しや。こんな事と知つたなら、あらゆる神や仏様、御信心申したらちつとは利生もあらうもの。外の仏へ願掛けたら雑行ぢやと思し召し、娘を救ふて下さるまいと、如来様ばかり念じてゐたのが今では悔しい。未来は奈落へ落つるとも、娘が命助けたい。どうぞ娘を助けて下され。

男を殺すとは、よくく、堪忍のならぬ訳。ありや間男、おつとどつこい、間女房事であらうも知れぬ」

と、噂取りくく口々に

見物「あんまり待つて寒なつた。鮫洲の茶屋で一杯せう。サアくござれ」

と打ち連れて、皆々カシカシこへ走り行く。

・子を思ふ、闇より闇に目も分かず、たゞさへ暗きてゝ親の

手を引く妻も諸共に、涙に見えぬ道筋を、現ともなく走るとも、夢路を歩む心地して、漸うかしこへ辿り着き。

見れば厳しき竹垣に、さも恐ろしき拔身の槍、『あれで我が子を殺すか』と思へば気も消え心消え、『ワツ』とばかりに泣き出だす。

庄兵「これくか、こゝがもう鈴ヶ森か。今のそなたの泣き声は、もうお駒は殺されたか。これ、早う聞かして下され」

と、問へば

南無如来様、如来殿、エ、如来め。サ、かう言ふがお腹が立たば、どうぞ娘が助かる様、お慈悲ぢや願ひ上げます」

と、愚に返つたる親心、

母はなほさら正体なく、

女房「才三殿が盗まれし茶入れとやらが出るならば、助かる筋もあらうかと、そればかりを楽しみに、今日よ明日よと待つ甲斐も、情けない今日の今、死ぬる娘が心の内、思ひ遣つていぢらしい。病み煩ひで死んでさへ、子を先立てし親の身は、悲しうてならぬもの。蝶よ花よと撫でし子を、科人にして殺すとはよくく前世の因果か」

と、狂気の如く身を悶え

夫婦手に手を取り交はし、絶え入り消え入る憂き涙、

余所に見る目も哀れなり。

後を追ひく下女、

男、

男女「ヤア旦那さん、おかみさん。嘆きはお道理、さり

ながらお怪我があつては猶大事、マア〜お出で」と手を引いて、暫く片へに介抱す。

・思ふ事叶はねばこそ憂き事の、恋と義理との諸手綱、
（王ツ）不憫やお駒は夫のため、かゝる憂き身の縛り縄、首に掛けたる水晶の、数珠の数さへ消えて行く、屠所の羊の歩みより、果敢なき身ぞと観念し、力なく〜引かれ来る。

・代官堤弥藤次お駒に向かひ、

代官「最前屋敷にて、役人中より申し渡されし如く、子細ありとは言ひながら、仮にも夫を殺したる科は遁れず。重き刑にも行はるべきを、お上のお慈悲を以て死罪に仰せ付けらるゝ。有難く存じ奉れ」

と言ひ渡せば、顔を上げ、

お駒「何事も皆私がかんで掛かる身の罪科、露いさゝかもお上へ対しお恨みはござりませぬ。有難う存じます」

と、覚悟極めし健気さに、

不憫と見遣る諸役人、涙紛らすばかりなり。

お駒は顔を振り上げて、

お駒「御見物様、いづれも様、夫を殺す大罪人、さぞ憎い奴、大胆者、徒者と皆様の、お憎しみもあるけれど、言ふに言はれぬ訳あつて、夫殺しの科人と、死に恥晒す身の因果。不憫と思し一遍の、御回向願ひ上げます。世上の娘御様方は、この駒を見せしめと、親の赦さぬ徒など、必ず〜遊ばすなえ。可愛い夫へ義理立てば、二親に嘆きを掛け、また親々へ従へば、言ひ交した夫へ立たず。果てはかうした浅ましいこの世からなる劍の山、身を切り裂かれ憂き恥を、晒すも定まる因縁尽く。約束事と諦めても、二世の契りのその人と、一世と限る二親の、もしや群集のその中に見えはせぬか」

と伸び上がり、伸び上がりても竹垣の、透間隠れの人群れに、目も泣き腫れて見え分かぬ、

心を思ひ諸見物、濡れぬ袂はなかりけり。

・群集押し分け二親は、竹垣に縋り付き、

女房「これ〜お駒や、と〜さんもこの母も、親子一世の暇乞ひぢやもの、来てゐいでよいものか、来てゐいでよいものかいのう」

庄兵「これ〜か〜、さぞやこの頃の憂き苦勞、娘が顔も瘦せたである。どの様にしてゐることぢや、エ、顔が一目見たいはいやい〜、見たいはいやい」

女房「いえ〜、わしやこなさんの目の見えぬのが羨ましい。見すばらしい娘が形、見てゐる母がこの胸は裂けるはいの」

と、どうど伏し、前後不覚に取り乱す。

お駒「オ、と〜さん、か〜さん。よう来て下さんした。わしや逢ひたかつた〜、逢ひたかつたはいな」

女房「オ、逢ひたい筈、道理ぢや〜。親仁殿やこの母より、まだそなたが逢ひたいと思やる」

お駒「ア、これか〜さん、もう言ふて下さんすな、言ふて下さんすな。聞く程恋しいゆかしいお人の、お顔が目先にちら〜と、片時々々も離れぬはいな。わたしがかういふ心から、お年寄られたお二人へ、こんな嘆

きを掛けます。必ず、必ず泣かずとも、『娘でもなんでもない。ありや前生の敵ぢや、憎い奴、不孝者』と、思ひ切つてふつ〜りと、嘆きをやめて下さんすが、少しは冥途の罪滅ぼし。わたしが死んだその後でも、必ずくよく〜思ふて、煩ふて下さんすなえ」

女房「それ〜、その様にしほらしい、孝行な事言ふてたもるもの、くよく〜思はいでかいのう、くよく〜思はいでかいの。なんの後に片時も生きてゐられう、二人ながら追つ付け未来で、逢ふはいのう」

お駒「ア、これ申し、その様に仰る程、わたしが身に罪が重なる。申しか〜さん、今のお人が見えたなら、『わたしが事は是非もなし。どうぞ宝を詮議して、ご出世なさるを冥途から楽しんでをります』と、よう言ふて下さんせ、エ。まだその上に氣に掛かるは、わたしが死んだ後にも、かのお人がこ〜へ来て浅ましい形を見やしやんしたら、ひよつと愛想が尽きやうかと、わしやそればつかりが悲しい」

と、今死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあじなさを、

思ひ遣りつゝ二親は、前後正体打ち倒れ、せき上げく
叫び泣き、音は浜辺に打ち寄する、波に波増す涙なり。

・『果てしはあらじ』と下部共、

下部「時刻移る」

と引つ立つる、

二人の親は竹垣に、隔てられたる親子の別れ、

見物群集は口々に、宗旨々々の手向草。

・折もこそあれ才三郎、丈八に縄を掛け、群集押し分け矢
来の内。

才三「御預けの茶入れの盗賊、喜蔵に紛れなき由、この

丈八が白状故、再び茶入れも我が手に入る。また喜蔵

丈八兩人は才三郎が親の敵。お上へ委細申し上げ、お

駒が命赦免の状、御披見あれ」

と差し出だせば

弥藤次取つて押し開き、

代官「成程々々、紛れなき赦しの趣。親の敵とある

からは、喜蔵丈八兩人は才三郎の心任せ。お駒はすぐ

に二親へ、御赦免なるぞ」

とありければ

『ハツ』とばかりに庄兵衛夫婦、夢に夢見し心地して、

悦び涙ぞ道理なり。

お駒が縄目とくくくと、解けて結びし恋娘、千代も変ら

ぬ御恵み、重ねくくって黄八丈、昔語りを今こゝに、伝へ

くし筆の跡、世々に伝えて語り草

(2026. 6. 25)